

1 馬場下——よみがえる記憶

地下鉄東西線「早稲田」駅の地上に出る。交差点の角から、「一六七八年創業」と看板にある小倉屋という酒屋が見える。堀部安兵衛が、昔ここで枮酒を飲んで敵討に向かった話は有名だ。しかし、毎日この入口を通る早稲田大学の学生でも、酒屋のすぐ隣が漱石の生家（牛込馬場下横町、現新宿区喜久井町一番地）で、生誕百年を記念して一九六六年（昭和四一）に新宿区が建設した黒い石碑が建っていることを知っている者は少ない。

夏目金之助（後の漱石）は、明治維新の前年一八六七年（慶応三）二月九日（陰暦では一月五日）に生まれた。父直克は、この地の名主（のち区長）で、金之助は末っ子である。先妻こととの間に、長女さわ・次女ふさがあり、金之助の上には後妻千枝の子が、長男大助・次男栄之助（直則）・三男和三郎（直矩）・四男久吉・三女ちか、と五人いた（久吉とちかは夭折）。幼少期に一時養子に出されたが、実家での記憶は、後までも生々しかったようだ。

晩年の小品『硝子戸の中』（二九一五）に描かれる馬場下の昔の風景は、心に沁み入って来る。ここは、東京の街中と郊外の接点だった。明治の末でも、

*「漱石誕生之地」（安倍能成筆）と刻まれた石碑。二〇一七年九月には、石碑の横に、松山時代の句で、生家の姿を思った「影参差松三本の月夜かな」を刻んだ句碑が、NPO法人漱石山房によつて建てられた。↓

P. 158

*だから明治の年数と漱石の満年齢は同じで、例えば明治三十八年は漱石三十八歳だとすぐわかる。同年生まれの文学者に、正岡子規・尾崎紅葉・幸田露伴らがいる。子規は三十五歳で、紅葉は三十六歳で死去しており、漱石はその後に小説を書き出すわけである。

この地点は牛込区と北豊島郡の境界である。維新直後は田圃が広がり竹藪があり、まだ人家は目立たない。後にこの地を通つた漱石は、街の変貌ぶりに驚いている。一八九六年（明治二九）から喜久井町の夏目坂上に一家で住んだ田山花袋も、長篇小説『生』^{せい}（一九〇八）で、どんだん家が建つて行くこの界隈の激しい都市化を描いている。

風景の推移は、懐かしい風景の記憶を強く喚起させる。印象的なのは、『硝子戸の中』に描かれる昔の記憶が、いつも「音」の世界に結び付いていることだ。近くの誓閑寺^{せいかんじ}（作中では西閑寺）の鐘の音、「やつちや場」の売り声、場末の寄席の講釈師の調子、そして小倉屋の娘「御北さん」^{おきた}の「旅の衣は篠懸^{すずかけ}の」という長唄『勸進帳』の冒頭の一節である。その究極が、十三歳の時に死別した「千枝」という名の母の姿である。「私は今でも此千枝といふ言葉を懐かしいもの、一つに数へてゐる」と記されるように、母の名の響きは永遠であり、馬場下で過ごした日々、ゆかりの人々も、この場所から静かによみがえる。地下鉄の地上出口は、瞬時に別世界をもたらず。わたくしたちも、漱石生誕の地が見える場所に立つて耳をすまし、喧噪の中から、一五〇年という時間を超えて、漱石という人間やその描いた世界を感じてみたい。

*ここでは明治初年の大区小区制での「区长」を言う。現在の「区」よりも狭い地域の代表として任命された。今で言えば、いくつかの町の集合の地区代表と考えてよい。

*戸籍上では「ちゑ」。「千枝」「知恵」とも書いた。

2 本郷・小石川——東京山の手の地形から

金之助は、九歳の頃養子先の塩原家に籍を置いたまま、馬場下の夏目家に引き取られる。夏目家に正式に復籍するのは、二十一歳の時だ。塩原金之助として学生時代を送った漱石だが、英語以外にも一時二松學舎（現二松學舎大学）で漢学を学んでおり、この世代の教養を考える時に大事である。子規もそうだが、見事な漢詩を作れる、最後の世代だったわけだ。

当時東京大学予備門は神田一ツ橋にあつたが、金之助は学生時代、東京のあちらこちらに下宿した。その時の体験が土地勘を生みだし、後の作品を書く時に生かされている。漱石作品に東京下町が登場するのは、ごくわずかだ。^{*}生家のある牛込の他、本郷・小石川そして上野が目立つ。『三四郎』（一九〇八）にも登場する本郷三丁目角の小間物店「かねやす」（作中は兼安）は、「本郷もかねやすまでは江戸のうち」という川柳でもよく知られている。帝国大学の本郷への移転が完了し、大学を中心に「本郷文化圏」が形成されるが、本郷の北部や小石川は、まだまだ野趣も残っていたのである。

『こゝろ』（一九一四）の「先生」は日清戦争の少し後、金に絡まる人間関係

^{*}漱石作品に下町が出てくる例は少ない。『吾輩は猫である』の「九」で、苦沙弥が盗まれた品物を取りに行くのは、吉原近くの日本堤分署である。『彼岸過迄』では、神田小川町に住む須永と母は、毎月深川の不動にお参りに行くという。須永の友人敬太郎は、浅草を散策し、蔵前で文銭占いを体験する。浅草のルナパークの描写には、松根東洋城の思い出（漱石先生と共に浅草木馬館の木馬に騎るの記、一九一七・一二「淡柿」）にある。漱石と東洋城からの浅草遊覧が反映しているだろうか。

に嫌気がさし、本郷の下宿から借家を探しに本郷台を西に下り、富坂を上って北に折れ、伝通院でんつういんのそばの素人下宿に辿り着く。そのあたりから見える風景は、「見渡す限り緑が一面」だったという。「御嬢さん」とも出会い、新たな気持ちに満たされるが、Kの登場はその静かな空間にも波乱を生み出す。

伝通院の西側の街は、『それから』（一九〇九）で三千代が住む場所である。

神楽坂薬店わらだな（現新宿区袋町）に、親からの生活費で一人住む代助は、牛込台地を下り、江戸川を渡って、今度は小石川台地を上って三千代に会いに行く。感情の起伏が東京の山の手の地形と結び付き、さり気ない場所の描写が、よく読むと深みを増す。

崖の下の奥まった家を借りて住む『門』の宗助・御米夫婦およねも、友人を裏切ったという過去を引き受けつつ、家にじっとしているだけではない。御米は易者に見てもらいに出かけ、宗助はかつての友人安井から逃げるように鎌倉に参禅に行く。

漱石作品では背景は絶えず流動的で、作中人物は、何かに追われるように、いつも東京を動き回る。山の手の起伏に富んだ地形は、人物の行動を描くのにぴったりのものとして、浮かび上がるのである。



明治の頃の小石川富坂の風景

3 松山——描かれた場所が息づく時

二〇一六年の新年、『坊っちゃん』（一九〇六）がTVドラマになり、話題になった。映画化・ドラマ化はいつの時代にも作品との距離を生み出すが、それを機にぜひ原作を手にしてみたい。あら筋を超えた作品の仕掛けは、なかなか見えないからだ。

主人公に名前がなく、「おれ」の一人称で話す形式であることを知っている人でも、山嵐と話す時は「おれ」で、教員会議の時は「私」と発言していることに注意することは少ない。清きよの使う親しみを込めた「坊っちゃん」は、赤シヤツが使うと相手を見くびったニュアンスとなる。「性格」を見事に描き分けたこの作品には、実は新しい文学概念による「性格」の語は見えず、あるのは「性分」「性たち」「気性」といった伝統的な語感を持つ言葉である。『坊っちゃん』は、言わば言葉の万華鏡なのだ。

作中に「松山」の地名が出て来ないことにも注意しよう。「四国辺のある中学校」とあり、*県庁や兵營のある城下町で、近くに温泉があるとなれば、松山しかない。漱石が若き日、一八九五年（明治二八）四月から約一年間そこで英

*自筆原稿では、漱石は最初「中国辺」と書き、「中」を「四」に直している。「中国」地方では、設定とかなり違ってしまっだろう。

語教師をしたことは事実なので、誰も疑問を持たない。が、作中の「おれ」の活躍は、一九〇五年（明治三八）九月から数か月間の、日露戦争の勝利直後の短い期間で、明らかに時期がずれる。講義に忙しい漱石は、作品を書く時に改めて取材に行っていない。この作品にはさまざまな時点での記憶や素材が、巧みに組み合わされているわけだ。わたくしは昔、松山に行き、道後温泉や街並みに親しんだことがある。漱石が、帰省した正岡子規と五十二日の間に一緒に住んで俳句作りをしたという「愚陀仏庵」も見学した。戦災で焼失したこの建物も再建されていたが、二〇一〇年土砂災害で倒壊した。^{*}

当時から海の玄関先だった三津浜^{みつはま}や、高浜沖の四十島^{しじゅうしま}も、ゆかりの場所だ。作中では、島の岩に生えた松を見て、赤シャツが「ターナーの画にありさうだね」と言い、野だいこが「あの島をターナー島と名づけ様」と提案する。

名づけることで、ものは生きて来る。『草枕』（一九〇六）の一節に、「ターナーが汽車を写す迄は汽車の美を解せず」とあるが、あだ名であつても、言葉を与えることで対象は現実味を持つ。モデル問題に深入りしなくてもよい。

『坊つちゃん』では、実際の松山を描いたのではなく、描かれることで松山が生きた地名となっているのである。

^{*}最近になって、再建への動きが出てきた。土地の所有者と松山市が協議して、再建に向かっているという。